

朝が訪れた。今朝の目覚めは、鮮やかな青空が誘ってくれた。あふれてくる陽光、色づいていく世界。小鳥のさえずり



詩人 四方 健二

生命育む朝の輝き

ずりは耳に優しく、陽射しかなぞる山の端。ゆったり流れる朝の時、いつもと変わらぬ夜明けがここにある。

朝は生の時。陽射しは生命を育むものだ。温かな輝きを振りまき、その熱で命を覚醒させていく。桜の大樹が新緑を煌めかせ、ハナミズキは空を目指して花を咲かせ

はないか」という思いにとらわれ、眠れなくなることさえある。

私は多くの死を見つめ、死と対峙して生きてきた。そんな私にとって、死とは現実として存在し、私の傍らに居座っている。

窓外に目をやれば、陽光は更に明るさを増している。そ

いで躍動を謳歌している。その煌めき、そのまぶしさ。生命が見せる輝きが、初夏のまぶしさをより一層、際立たせているように思う。幾数もの命が輝きを誇っているからこそ、初夏はまぶしいのではないだろうか。

煌めく世界にあこがれ、私もそこに加えてもらおう。空の下に、太陽の傍らに、漂う雲の中に私を置いてみるのだ。トビの滑空を

追いかけて、私はつかの間の自由に陶酔する。

る。風の行方を目で追えば、ツバメの羽ばたきをかけて行った。

朝の光景はみずみずしく、私の目に映るあらゆるものが、こちらへ向かって笑いかけてくる。

朝の生に対し、夜は死だ。

夜は私に死を連想させる。重い闇の中に埋もれていると、「このまま目が覚めないの

の力強さ、その鮮やかさ。それらを目の当たりにして、私は羨望の眼差しを禁じ得ない。

初夏はまばゆい季節。夏を迎える輝きに、誰もがまぶしさを覚えることだろう。しかし、そこに映るまぶしさは、降り注ぐ陽射しのせいばかりではない。

この季節、生命は太陽を仰

わらない朝が、いつもとおりに訪れた。「いつもどおり」。それは、平穏な時を表すもの。積み重ねられる毎日を意味するものだ。生きていくからこそ迎えられる、いつもどおりの朝。そのいつもどおりが、私にはう

れしい。